



これからはお世話になった地元への恩返しを

国立病院機構 広島西医療センター 総合診療科 渡邊 凌平

総合診療科専攻医1年目の渡邊凌平と申します。現在は広島県大竹市の広島西医療センターで勤務させていただいております。

私は、広島県の北に位置する安芸太田町で生まれ中学生まで地元で過ごしました。安芸太田町は自然の豊かな場所で、夏には釣りやカヤック、秋には紅葉、冬にはスキーやスノーボードと年中自然の中で遊ぶことができます。幼少期の頃は、地元の方みんなに見守られながら、自然の中で遊びまわっていました。

そんな私が医師を志そうと思ったのは高校3年生の出願を決める少し前のことでした。他の医師の方と比べるとかなり遅い決断だったと思います。

両親、祖父母はみんな医療従事者でしたので、何となく医療関係の仕事に就こうと漠然と考えておりましたが、勉強に自信がなかった私は医師になるのは無理だと早々に諦めていました。医師として働く父の姿を近くで見ていたので、今思えば内心は医師になるのに憧れていたのだと思います。そんな中、私の背中を押してくれたのは「医師を目指してほしい」という父親の言葉でした。父親の後押しもあって医学部を受験しましたが、当然勉強は間に合わず、現役時代はほぼ記念受験のような形になってしまいました。そこから浪人を重ね、無事栃木県の医学部へ入学することができました。

大学時代は半分がコロナ禍ということで、部活動や行事もなかなか行うことのできない状況でしたが、何とか病院実習も行うことができ、楽しく過ごしておりました。

初期研修は広島に戻り、広島大学病院で2年

間研修させていただきました。さまざまな科で実習をさせていただく中で、どの科に進むべきかとても悩みましたが、私が決断したのは総合診療科という道でした。総合診療科を選んだのは、研修中の指導医の先生の影響が強かったと思います。指導医の先生の熱源精査など足のつま先から頭の先まで徹底した診察をする姿、幅広い知識と技術で適切な医療を提供する姿、不定愁訴に対して時には厳しくも最後には患者に寄り添って対応する姿にとっても感銘を受け、私も総合診療科を志望しました。

専門性がないことが総合診療科としての弱みといわれておりますが、逆に言えば専門性がないことで広い範囲を診療できるという守備範囲の広さが強みになると思っています。また、どの領域か分からない症状の患者に対して、専門診療科へのスムーズな橋渡しができるという点においても、総合診療科の力が大いに発揮できると思っています。

総合診療科として働き始めて数ヶ月ですが、患者本人だけでなく、家族との関係性や職場の環境、退院先の施設調整といった患者の生活にまで目を向ける総合診療科は、私の性に合っていると思っています。

現在は日々の外来や病棟、救急での対応、まだまだ分からないことも多くバタバタと過ごしています。ただ、毎日学びがあって楽しく過ごせております。

いつかは、総合診療医として地元に戻って子どもの頃お世話になった方々に恩返しできればと思います。その際にしっかりと地域の方々に貢献できるよう日々精進していきます。